

る、その人數をしらむとて、四五兩月がほどかぞへたりければ、京の中一條より南、九條より北、北京極よりは西、朱雀よりは東、道の邊にある頭すべて四萬二千三百餘りなむ有ける。況や其前後に死ぬるものも多く、川原白川西の京もろくの邊地などをくはへていはゞ、際限も有べからず、いかにいはむや、諸國七道をや、近くは崇徳院の御位の時、長承の比かとよかゝるためしは有けりと聞ど、その世のありさまはしらず、まのあたりいとめづらかに悲しかりし事也。

〔養和二年記〕養和二年元年正月廿五日丙申、此間天下飢饉以後、過路頭人々伏死、又天下強盜毎夜事也。已相同長承飢饉令泉院末者也。上品白綾一卷僅相博三斗耳。二月廿六日丁卯、此間天下ニ飢饉強盜引裸燒亡、毎日毎夜事也、不可勝計。清水寺橋下二十餘許アル童食小童口令見之云々、人相食之文已顯然也。又犬斃ヲ又犬食、是飢饉徵也。希代事也。

〔百練抄安德〕壽永元年正月十七日、近日嬰兒棄道路、死骸滿街衢、夜々強盜所々放火、稱諸院藏人之輩、多以餓死。其以下不知數、飢饉超前代。

〔皇帝紀抄安德〕壽永元年、天下飢饉、同去年旱魃疫癟、越年之死人在牆壁。

〔玉海〕壽永三年元年正月十四日甲辰、或人云、關東飢饉之間、上洛之勢不幾云々、實否難知歟。

〔皇帝紀抄後堀河〕寬喜三年五月廿一日、風聞、近日飢饉甚之間、京中在地人等、合力推入富家、飲食之後、推借錢米等、數多分配取事、所々多聞云々。廿二日、取事仰武家被停止之。六月十一日、祇園內常行堂上、餓死者出來之間、令破築地上取棄云々。

〔百練抄十三後堀河〕寬喜三年六月十七日、自去春天下飢饉、此夏死骸滿道、治承以後未有如此之飢饉。

〔暦仁以來年代記〕正嘉二年六月、寒冷如例、二三月仍五穀不熟、天下一同、仍次年元年正月大飢饉、餓死者不知其數、百文直、僅小升三升也。

〔如是院年代記〕明德元年南朝元中七年庚午、自至二年、天下大飢。